

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19330045

研究課題名(和文) 格差社会の総合的評価方法の開発

研究課題名(英文) On the Unified Assessment for Economic Inequality

研究代表者

福重 元嗣 (FUKUSHIGE MOTOTSUGU)

大阪大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：10208936

研究成果の概要(和文): 格差社会を評価するために、経済的不平等について所得格差ではなく消費水準の不平等をもとに格差を評価する方法に関して改善を行い、その実証分析における有効性について検討した。さらには、消費水準では捉え切れない居住環境の格差について、住居の状況、医療機関へのアクセスといった面よりアンケート調査を行い、その需要要因について検討した。また、レジャーに関しても、特に旅行に関する質的な要求に関する分析を行った。

研究成果の概要(英文): To evaluate the inequality among households, we modified the consumption inequality measure and investigate its empirical advancements. Furthermore, to evaluate environmental inequality among households, we conduct a questionnaire survey for dwelling environment: housing quality and access to medical services, and estimate demand function for those environmental qualities. Additionally, we conduct a demand analysis for leisure and tourism.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2008年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2009年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済統計学

キーワード：格差社会、所得分配、不平等尺度、資産評価、住宅評価、居住環境

1. 研究開始当初の背景

(1) 『格差社会』という言葉がしばしば新聞や雑誌で取り上げられるようになって来ており、これは単なる社会的な現象ではなく、学術的な研究が数多く行われると同時に、学術的論争も盛んに行われていることを反映したものであった。

(2) しかしながら、この問題を経済統計学的な視点より考察しようとするとき、『格差』とは、どのように定義されるものである

のか、それをどのように計測することが出来るのか、あるいはどのように計測すべきであるのか、といった議論が欠如していた

(3) 伝統的に考察されて来た不平等尺度は一時点での所得であり、個人の生涯全体での所得や、家計の複数時点での所得を総合的に評価する方法は、ライフ・サイクル恒常所得仮説に基づいた経済的不平等の計測などがあるのみであった。

(4) 消費水準による経済的な不平等の計測は、ライフ・サイクル恒常所得仮説という個人や家計の効用最大化を仮定した、経済学的にも意味のある不平等の計測方法であり、昨今の『格差社会』を統計学的に分析する上でも強力な分析ツールである。

(5) しかしながら、消費水準を持ってライフ・サイクルにおける効用水準を推計するという試みは、非常に単純な個人の通時的な効用最大化問題より導き出される結果であり、いわゆるライフ・ステージの変化を充分評価できるかという点で充分ではない尺度であった。

(6) それぞれのライフ・ステージにそのライフ・ステージに適した消費パターンが存在しており、生涯における消費水準を平準化するという単純な仮定が成り立たない可能性を示唆するものである。特に家族構成の変化は、個々の時点における家計に対して同一の水準の効用をもたらす消費水準の変化をもたらすと考えられる。

(7) 同時に見落としていけないのは、住居等の居住環境から得られる効用に関してライフ・ステージとの係わりは大きいと考えられる。

(8) ライフ・スタイルの多様化とも呼ぶべき現象が起きている近年においては格差社会を総合的に評価するためには、このようなライフ・ステージの変化と家族構成の違いを考慮した経済学的な不平等の計測方法の開発が不可欠であると考えられる。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、格差社会を総合的に評価するため、個人のライフ・スタイルの多様化に対応した消費水準に基づく経済的な不平等の計測と住居から得られるサービスについてライフ・ステージによる変化を考慮した計測方法を開発することによって、格差社会と呼ばれるものを総合的に評価する方法を提案することにある。

(2) アンケート調査を行うことによって、家族構成やライフ・ステージの違いによって家計の消費水準が同一であっても、消費や居住環境から得られる効用水準が異なる場合、消費水準を家族構成や住環境でそのように補正し、ライフ・サイクルに置ける効用水準をより正確に計測できるのかを検討する。具体的なアンケート調査の内容としては、仮想的な家族状況や住環境を家計に提示して、消費水準をどの程度まで変化させることが出来るのか所得の将来的な予測についてどの

ように考えるのか、といった内容を聞くことによって、ライフ・サイクルにおける効用水準をより正確に計測するためには家族構成や住環境の違いによってどのように消費水準を補正すべきであるのかを明らかにする。

(3) 従来提案された経済的な不平等尺度を修正し格差社会を総合的に評価するための新たな指標や評価方法について提案を行う。

3. 研究の方法

(1) 第1段階として、経済的な格差を総合的に評価するための経済理論的及び経済統計学的な分析方法の開発を目指す。

(2) 第1段階において検討すべき経済理論的な問題は、従来は代表的な個人よりなる家計の効用関数をもとに多くの経済分析が進められてきたのに対して、本研究では個人のライフ・サイクルの中で変化するライフ・ステージごとに効用水準を比較する方法を開発する必要がある。

(3) 経済統計学的な問題としては、官庁統計として調査されている『家計調査』や『全国消費実態調査』、更には居住環境に関する調査としての『住宅・土地統計調査』のデータに基づいて、どの程度まで経済格差を総合的に評価できるかについて検討する。とくに住宅サービスに関する経済的な評価である帰属家賃の推計方法については、従来の方法の限界や問題点を明らかにする必要がある。

(4) 第2段階では、第1段階で明らかになった、この問題に対して官庁統計による接近方法の限界を踏まえ、具体的には、どのような質問項目をアンケート調査によって聞くことによって経済格差を総合的に評価しうるのか、ライフ・ステージの変化による効用関数の変化、居住環境の違いによる効用水準の違いをどのように調査し評価すべきかについて検討する。

(5) 住環境の格差と家族構成の違いをライフ・サイクルでの効用水準を代理すると考えられる消費水準の補正にどのように用いるのが、この分析での重要なポイントとなると考えられる。アンケート調査によって得られたデータに対して具体的に補正を行い、格差社会を総合的に評価する指標についての実用可能性及び現実妥当性について検討を行う。

(6) 具体的な問題点や仮説についてアンケート調査を用いて検討可能な部分について追加修正した同規模のアンケート調査を行い、格差社会を評価する指標の頑健性を

エックする。

(7) アンケート調査の結果を統計学的手法及び計量経済学的手法を用いて分析し、経済的な格差が、従来の所得や消費水準で捉えられているものに比べ、ライフ・ステージの違いによる効用関数の変化や居住環境からの効用と家族構成の関係を考慮した場合にどのように異なるのかを明らかにする。

(8) アンケート調査とは別に、経済格差の総合的な評価方法が国際的な比較研究において充分耐えうるものであるために、アジアなどの海外の国々においてヒアリングを行い、等価尺度や居住環境の差による効用水準の違いに関して、国際的な比較可能性について検討する。

4. 研究成果

(1) これまでの研究の拡張として、恒常所得仮説に基づく経済学的不平等尺度について、その時系列的特性を明らかにするとともに、従来の所得に基づく不平等度との関係が明らかになる統計的な分析を行った。また地域間の不平等に関して、経済学的不平等を分解し、生産や所有と経済活動の地域間格差に関する評価方法について提案を行った。具体的なデータは我が国の地域間データと大韓民国の所得と支出に関するデータを元に分析を行った。〈雑誌論文 . . . 〉この過程で、所得と貿易および公的資本との関連についても明らかにする必要があり、データの作成および因果関係の検定に関する研究を行った。〈雑誌論文 . . . 〉

(2) 従来の消費水準に基づく経済学的不平等にバイアスを生じさせる要因として、生活上のリスクの影響に関して、食品の安全性から来るリスクと高齢化や天災によるリスクに対する消費者の態度に関する実証分析を行い、消費水準のゆがみの実態について明らかにした。〈雑誌論文 . . . 〉〈学会発表 . . . 〉

(3) 消費水準そのものには直接反映されないレジャーおよび住環境の影響および格差の実態について実証分析を行い、レジャーに関してはリピーターとそうでない旅行者では需要構造が異なることを明らかにし、住環境に関しては、たとえば家屋の広さと家族人員の関係や最寄り駅への利便性と経済価値について、単純な足し算ではなく非線形の関係が存在することを明らかにした。このことは、住環境より経済格差を計測する上で、等価尺度の計測の重要性を明らかにする研究となった。〈雑誌論文 . . . 〉〈学会発表 . . . 〉

(4) 研究の副産物として、長期金利と短期金利の関係について、経済学的にみて意味のある分析に関して提案を行った。〈雑誌論文 〉〈学会発表 〉また不連続な調整過程を持つ動学的な家計の行動について、最適な条件を元に評価する方法についても提案を行った。〈雑誌論文 〉

(5) 以上の分析に加えて、以下のことが明らかとなった。

格差社会を総合的に評価するため、個人のライフ・スタイルの多様化に対応した消費水準に基づく経済学的不平等の計測に加え、住環境やレジャーの消費といった直接消費水準に現れない格差を評価することの重要性、あるいは、日常生活に関わるリスクに対する経済学的不平等のある評価方法を確立することが重要であることが明らかとなった。

格差評価に関して総合的な評価については、以上の研究を通じて、個々の側面を取り入れ評価していくことを明らかにすることができたが、具体的な格差指標の総合化あるいは、多元的な格差の評価については、今後さらなる検討が必要であることが明らかとなった。

アンケート調査に基づくリスク等に関する評価方法については、現在も論文を作成中であり、今後この方向で研究を進展させていくことが重要であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{ 雑誌論文 } (計 12 件)

Sumie Sato and Mototsugu Fukushige "The North Korean Economy: Escape from Import-Led Growth" *Journal of Asian Economics*, Vol. 22, No. 1, 76-83. 2011 年 2 月 (査読有)

Kaoru Okamura and Mototsugu Fukushige "Differences in Travel Objectives between First-Time and Repeat Tourists: An Empirical Analysis for the Kansai Area in Japan", *International Journal of Tourism Research*, Vol. 12, Issue 6, 647-664. 2010 年 11 月 (査読有)

Takashi Ishida, Noriko Ishikawa and Mototsugu Fukushima “Importance of Blanket Testing in Promoting American Beef for Japanese Consumers”, *International Journal of Consumer Studies*, Vol. 34, Issue 6, 665-673. 2010年11月(査読有)

Takashi Ishida and Mototsugu Fukushima “Effects of Fishery Harbor-Based Brands on the Brand Equity of Shore Fish: An Empirical Study of Branded Mackerel in Japan”, *Food Policy*, Vol. 35, Issue 5, 488-495. 2010年10月(査読有)

Noriko Ishikawa and Mototsugu Fukusuhige, “Households' Attitudes toward Earthquake Protection: An Empirical Analysis of the Impact of Fiscal Support in Japan,” *Journal of Housing Economics*, Vol. 19, No. 1, 51-65. 2010年3月(査読有)

Kazuhiko Kakamu and Mototsugu Fukushima “Multilevel Decomposition Methods for Income Inequality Measures,” *Japanese Economic Review*, Vol. 60, No.3, 333-344 . 2009年9月(査読有)

Kenji Azetsu and Mototsugu Fukushima “The Estimation of Asymmetric Adjustment Costs for the Number of Workers and Working Hours -Empirical Evidence from Japanese Industry Data-,” *Applied Economics Letters*, Vol. 16, Issue 10, 995-998. 2009年7月(査読有)

Masato Ubukata and Mototsugu Fukushima “Estimation and Inference in the Yield Curve Model with an Instantaneous Error Term” *Mathematics and Computers in Simulation*, Vol. 79, Issue 9, 2938-2946. 2009年5月(査読有)

Noriko Ishikawa and Mototsugu Fukusuhige, “Impacts of Tourism and Fiscal Expenditure on Remote Islands in Japan: A Panel Data Analysis,” *Applied Economics*, Vol. 41, Issue 7, 921-928. 2009年3月(査読有)

Sumie Sato and Mototsugu Fukusuhige “Globalization and Economic Inequality

in the Short and Long Run: The Case of South Korea 1975-1995,” *Journal of Asian Economics*, Vol. 20, No. 1, 62-68. 2009年1月(査読有)

Izumi Miyara and Mototsugu Fukusuhige, “The Types of Public Capitals and Their Productivity in Japanese Prefecture,” *Japanese Economic Review*, Vol. 59, 194-210 . 2008年6月(査読有)

Mototsugu Fukusuhige and Noriko Ishikawa, “Decomposing interregional differentials in productivities: An empirical analysis for Japanese data”, *Economics Letters*, Vol. 97, 240-246. 2007年12月(査読有)

[学会発表](計6件)

石田貴士・石川路子・福重元嗣 『BSEによるアメリカ産豚肉およびアメリカ産野菜に対するリスク認知の派生』 2010年6月19日~20日 日本応用経済学会(西南学院大学)

石川路子・福重元嗣 『高齢化社会における転居希望要因：関東地方における実証分析』 2009年12月12日~13日 応用地域学会(山形大学)

石川路子・福重元嗣 “How do people choose their primary care doctor?: an empirical research for Kanto area in Japan” 2009年11月22日~23日 日本応用経済学会(神戸大学)

石川路子・福重元嗣 “Floor Space Demand in an Aging Society: An Empirical Investigation for Kanto Area in Japan” 2009年7月18日~19日 Institution and National Competitiveness (Seoul National University, Seoul, South Korea)

松井和久・福重元嗣 『高さ規制が地価に与える影響に関する実証分析-京都市・新景観政策導入による効果』 2008年11月8日~11月9日 応用地域学会(釧路公立大学)

Masato Ubukata and Mototsugu Fukushima “Instantaneous Error Term and Yield Curve Estimation” 2007年12月10日~14日 MODSIM07 (University of Canterbury,

Christchurch, New Zealand)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

福重 元嗣 (FUKUSHIGE MOTOTSUGU)

大阪大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：10208936

(2)研究分担者

石川 路子 (ISHIKAWA NORIKO)

甲南大学・経済学部・准教授

研究者番号：10379464

(3)連携研究者

なし